

経営の視点

早くも来年のトップ人事の発表が始まった。気付いたことがひとつある。「社長」という肩書が軽くなっていることだ。

例えば、武田薬品工業。次期社長に指名されたクリストフ・ウェバー氏にとって、社長とは見習い中の肩書にすぎないのではないのか。欧米で経営トップを指す「最高経営責任者（CEO）」に就任し、名実ともに経営トップのイスに座るのは、まだ先だからだ。ウェバー氏は来年6月、武田初の外国人社長になるが、CEO就任は、その1年後がめどという。武田にとって、そのときまでは「ト

消える社長、増えるCEO

ップ候補のお試し期間」の meaning がある。江戸時代から続く老舗でもある武田は、大胆に見えて慎重に事を進めているのだ。社長ではなく、CEOこそ会社の最高権力者……。そんな会社は武田だけでは、昨年以降、タイヤ世界3強の一角を占めるブリ

る。プリチストンは売上高の8割程度を国外で稼ぎ、株式の約3分の1は海外の投資家が握る。津谷正明CEOは「世界の目を意識せざるをえない」と話す。日本で初めてCEOを名乗ったという有力経営者

界3強の一角を占めるブリ。日本では、グローバル企業の先駆けであるソニーの盛田昭夫

が先週16日に発表したトップ人事。世間の関心は社長が強い権限を持つて会社を動かすなら、その実績を社外取締役がしっかりチェックしないと、効果は上がらない」と話している。

世界に見える企業統治を

チストン、コンビニ大手のロソンなどの経営トップはCEOを名乗り、従来の社長という肩書は捨てた。理由の1つは、CEOという肩書には社長とは違う効能があるからだ。両方も法律上は単なる呼称ではないが、海外に出ると、CEOの肩書があるか、ないかで相手の対応が変わ

るが、経営陣のパワーバランスから、社長の存在感そのものが軽く見られてしまうケースもある。東海旅客鉄道（JR東海）が先週16日に発表したトップ人事。世間の関心は社長が強い権限を持つて会社を動かすなら、その実績を社外取締役がしっかりチェックしないと、効果は上がらない」と話している。

（編集委員 武類雅典）